特集　受け継ぐもの　しまくとうばとやちむん

緒言　受け継ぐものの諸相

平岩　健

ことばやもの作りを受け継ぐということは、その背後にどのような動機づけがあったとしても本来は意識せずに綿々と続いていくのが理想であり平常であるのかもしれない。「受け継がなければ」と考えなければならない状況にあることはむしろ異常であり決して望ましい状況ではないとも言える。そのような状況に置かれているものの典型の一つが世界に数多く存在する消滅の危機に瀕した言語であろう。言語は話者に使われ、愛され、話者にとって空気のような当たり前の存在でなければならない。ましてや消滅するなどという懸念は本来持たれるべきでないものである。ところが琉球諸語は今まさに岐路に立たされている。

琉球の言語の理論的研究を始めて一五年以上経つが、何度も沖縄に通ううちにすぐに沖縄の「やちむん」（沖縄語で「焼き物（やきもの）を意味する）の魅力に取り憑かれてしまった。そしてそこから日本の手仕事の素晴らしさに魅せられて現在に至っている。ちょうど二十年前に西アフリカのガーナに一年間滞在し、とある北部の村の言語の調査研究をしていた際には、やはりガーナの木工品や布など民藝というべきものに大変感銘を

受けた。こういうこと自体は私や研究者に限らずよくあることであろう。しかしよくよく考えてみると言語もやちむん・民藝も、一段抽象化するといずれも個から個、世代から世代へと「受け継ぐ」ものであり、そこに興味深い共通性や重要性、そして魅力があるのではないか。また「受け継ぐ」という点で同じ問題に直面しているのではないか。それが本シンポジウム（「受け継ぐもの　しまくとぅばとやちむん」（二〇二三年二月二五日 於 明治学院大学））を着想するに至ったきっかけであった。しかし私は理論言語学を専門とする者であり、民藝やそれに関連する分野の専門家ではない。研究者が自分の研究分野以外についてあたかも分かったような顔をして好き勝手に述べることは決してしてはならないことである。そこで各分野で活躍される三名の方（松田共司親方（読谷山焼北窯松田共司工房）、白土慎太郎氏（日本民藝館学芸員）、宮良信詳氏（琉球大学名誉教授））にご登壇いただいた。

本特集は「受け継ぐ」ということをテーマに、何をどう受け継ぐのか、その難しさや大切さ、等を考える機会として、本シンポジウムでは語り尽くせなかったことを登壇者それぞれに語っていただくことを目的に企画し、寄稿していただいた。繰り返しになるが、「受け継ぐべきものは何か」、「どう受け継ぐのか」、そして「受け継ぐ上で何が問題でどう解決すればよいのか」、私は専門家ではないので確固とした答えは持ち合わせていない。それぞれの答えは登壇者の三名が確かに持っている筈である。

しまくとぅばとやちむん

本シンポジウムの発想のもとになった「しまくとぅば」と「やちむん」の間に存在する共通性を言語学者の視点から述べておきたい。

本特集の宮良信詳氏の論考にもある通り、しまくとぅば（琉球諸語）は日本語の方言ではなく、言語学的には独立の言語群である。今だに日本語の方言であるとか、標準語である日本語に従属した劣ったものであると誤解されることがある中、言語学者でもない柳宗悦が、沖縄の陶器や織物や舞踊等と並んで「琉語」に目を向け、方言論争を巻き起こしたことはさすがに慧眼である。しかし柳宗悦の問題提起にもかかわらず、現在すべての琉球諸語が日本語という言語の前に消滅の危機に瀕している。最初に述べたように、まさに「受け継がなければ」消えてしまう状況にある。私たち言語学者は現在しまくとぅばの話者と調査研究を行うことができているが、十年後に今と同じように研究できているだろうか。率直に言うと答えは悲観的である。この「受け継がなければ」消えてしまうかもしれないという状況は、後継者問題、原材料の問題、安価な代用品の問題等を考えると民藝にも当てはまるかもしれない。表面上はやちむんは危機には瀕していないが、やはりこれから考えていかなく

てはならない問題は多いように感じられる。

最初に述べたように、しまくとぅばもやちむんも民藝と称されるものも、一度消えてしまうと全く同一の元のものに戻すことは極めて困難である（特に言語は全く不可能である）という共通点がある。その理由は、ことばもものもそれらを生み出すのはヒトの心的プロセスに他ならないからである。言語に関しては言語学者のNoam Chomskyが言語をI-Languageと定式化し、ヒトのみが暗黙的なKnowledge of Language（言語知識）を生得的に有するとした。手仕事やもの作りにおける様々な知識（「身体知」とも称される）もまさに同様で、往々にして非常に内省しにくい、言語化しにくい知識である。哲学者のMichael Polanyiはこれを「暗黙知」と呼んだ。

故に、言語を受け継ぐにはヒトの中に受け継がれなければならない。宮良信詳氏の論考において、しまくとぅばの学校教育への導入、受け継ぎ手となる若い子供たちへの教育の必要性が強く主張されている所以である。言語は化石として残らないとはよく言われることであるが、その代わりに言語は辞書や文法書といった書物としてある程度残すことは可能である。一方やちむんや民藝は形としては残る。したがって美術館や博物館などに収蔵して残すことも可能であろう。しかし、そのように残すことはもちろんここで言う意味での「受け継ぐ」ことではない。しまくとぅばもやちむんも民藝もヒトの中に受け継がれてこそ初めて受け継ぐと言える。

まさにこの「言語知識もやちむんや民藝における身体知もどちらも暗黙知である」という共通点が、この二つがどのように習得され身に付くのかという問題をさらに非常に難しくしている。言語にしろやちむんにしろ民藝にしろ「見て聞いて覚えろ」という側面が多々あることは否定できない（沖縄語では「みーなれー、ちちなれー」と言う）。第一言語（母語）の場合はヒトに内在するUniversal Grammarのおかげでそれで難なく習得できるが、第二言語（外国語）となると大人になってしまってから「聞いて覚える」のは容易ではないし多大な時間を要する。またこの「見て聞いて覚えろ」という経験的方法論は、身体知を受け継ぐ上ではよく機能することが多い一方で、一旦「受け継がなければ」消えてしまうという切迫した状況に陥った時は時間がかかりすぎるという負の面もあるだろう。暗黙知であるが故に意識的に教授することは極めて難しい。暗黙知は極めて言語化が困難であり、言語化できないものはことばで伝えにくい。Noam Chomskyは「言語＝コミュニケーションの道具」であるという一般的な通念に対して、言語はどこまでコミュニケーションの道具として最適化されているのだろうかと問う。それは暗黙知の問題を考えるとすぐに答えが分かる。Michael Polanyiが言うように、私たちは明らかに言葉にできることより多くのことを知ることができるのであり、言葉にできないことはとても多い。言語は私たちが思っているほどコミュニケーション、意思の伝達には最適化されていないのである。

では、ことばは暗黙知の習得に何の役にも立たないのだろうか。ことば（言語知識）ともの作り（身体知）の関係は単に共通性があるだけにとどまらない。陶藝にせよ、民藝にせよ、それらを作る高次の認知能力はヒトの持つ言語能力の進化なくしては不可能であっただろう。いかに言語化がしにくいとは言え、いくら言語が不器用な道具であるとは言え、言語を全く用いずにやちむんや民藝の身体知の習得が行われるわけではない。では言語は身体知において一体どのような役割を果たしているのだろうか。科学者としての私の関心はここにあるのだが、残念ながらその答えはまだ全くといいほど分かっておらず、科学的には極めて興味深い領域である。役にたつだけではなく言語化が時には邪魔となることも十分にあり得る。私たちヒトは良くも悪くも言語に極めて大きく依存する生物である。言語により曖昧な世界を分節し、理解することが可能になる一方で、創造の場ではそれが自己を縛ってしまい、自由な発想が妨げられることもある。言語と身体知の関係性を科学的に解き明かすことは「受け継ぐ」ということの一側面を明らかにする可能性を秘めているように感じる。新たなブレイクスルー的研究はこれまで関係がないと思われて来た分野同士の学際領域がつながった時に生まれることが多々ある。もし拙稿が認知科学者の目に止まり、理論言語学者との共同研究に興味を持たれた場合は是非ご連絡いただきたいと切に願っている。

受け継ぐということ

「受け継ぐ」ということばに内在する視点は過去だけではない。過去のものを現在に受け継ぎ、それを未来につなげるというように過去、現在、未来という時間軸が内在している。また「受け継ぐもの」にはもちろん形ある「もの」もあるが、目には見えない「こと」もあるに違いない。「受け継ぐ」ということには、これまでに受け継がれてきた何か変わらぬものやこと、大きな支えとなるものがある（松田共司親方はよく「根」という言い方をされたりもする）。言語の場合は私たち言語学者がUniversal Grammar（普遍文法）と呼ぶ生成メカニズムであり、Faculty of Language（言語機能）と呼ぶものであり、それから生じている地球上の六〇〇〇以上もの個別言語の生成的文法システムである。変わらず受け継がれていくものがあってこそ、連続体としての同一性の保持が可能でり、その重要性は計り知れない。もの作りにおいてはそれがどういうものであるのかは私のような素人には分からないが、松田共司親方、白土慎太郎氏の寄稿にそれぞれ述べられているように思う。

しかし最後にここでは敢えて、受け継ぐということのもう一つの側面に目を向けてみたいと思う。本シンポジウムと本特集を通して敢えて「守るもの」ではなく「受け継ぐもの」ということばを用いた。受け継ぐということは単に過去から現在、そして未来へと寸分違わぬものを守り、受け渡すことではない。寸

分とも変わらぬことが美徳とは必ずしも限らない。変化は必然であり逃れられないものである。言語も同様である。古くは既に枕草子にもことばの乱れを憂う一節があることはよく知られているが、今も昔も言語の話者の中にはその時その時常に若い世代に見られることばの変化を「ことばの乱れ」であるとあたかも「正しいことば」が存在するかのように感じるものである。しかしことばの変化は決して乱れではない。どの言語においても、ことばはそれぞれ一人一人の話者の中ではむしろ常に変化し続けているものであり、常に新たな音声、意味、単語、文法が生じては消えていくというプロセスが繰り返されている。そのダイナミックな営みは誰にも止めることができないものであり、縛ることはできない。尤も、ではどのような変化であっても許容されるかと言われれば決してそんなことはあり得ない。言語学者が明らかにしたところによれば、変化や変異そのものも実は言語システムの原理メカニズムが許容する形式でしか起こらないのである（それは生物進化理論における遺伝、複製、突然変異のプロセスを想起すると分かりやすい）。

やちむんや民藝においてはどうだろうか。使うことと密接に関わる雑器も民藝も、使われるものであるからこそ、その時代その時代に敏感に反応し少しずつ変化するものではないだろうか。私がやはり美しさや魅力を感じるのは一切何も変わらぬものではなく、どこかにわずかながらであっても、作り手やその作り手が生きる時代の新しさ、変化、らしさ、挑戦、想像や創造が自然と滲み出ているものであるように感じる。理論物理学者のAlbert EinsteinはImagination is more important than knowledgeという言葉を残している。その真意は誤解されることも多いが、しっかりとした知識（基礎）を前提とした上で想像する力、想像を働かせて創造的に考える力の重要性を述べたものである（と私は考える）。何も変わらないままのものは、話者が途絶えて使用されることがなくなった言語のようなものである。当たり前であるが話者が消滅した言語、日常的に使われることがなくなった言語は変化せずやがて消滅する。白土慎太郎氏の論考が的確に指摘しているように、沖縄のやちむんも実は新たなものを受け入れ昇華させることにより受け継がれて来ている。そのように考えると、やちむんが現在使い手である人々も作り手である人々も魅了し続けているのは、やちむんには沖縄のやちむんという「根」を大切にしつつ、多様な変化や新しさや挑戦、想像と創造を許容する豊かさや大らかさがあるからではないかと感じずにはいられない。

さて、素人の戯言はここまでにして是非三名の寄稿を読んでいただきたいと思う。

結びに代えて本号の表紙について少し記しておきたい。本特集を組むにあたり松田共司親方に何か表紙によいやちむんはないかご相談したところ、「何か沖縄らしいものがいいね」とお

っしゃり、二〇二三年六月の窯焚でアンダガーミ（油甕）を焼いてくださった。アンダガーミは沖縄では昔豚のラードを貯蔵するために各家庭で使われていたもので、ネズミ等から守るために耳に棕櫚紐を通して蓋をし台所に吊るしていた沖縄独特のやちむんである。しかし窯焚中にちょうどこのアンダガーミを置いていた登窯の袋の天井が落ちてしまい、窯くそと呼ばれる降りものが大量についてしまったのだと言う。まさに登窯ならではのことであるが、とても焼き上がりがよかっただけに残念でもあり、松田共司親方は当初もう一度作りましょうかとおっしゃっていた。しかしその夜那覇に戻り改めてよく考えてみると、実はこれもまさに「受け継ぐ」という壮大な営みの中の一つなのではないかと思い至った。私たちはともすればうまくできたもの（「上等（ジョートー）なもの」）、目に見える最終的な結果に目が向きがちである。しかし、登窯で焼かれるものの数は膨大で、うまく焼けるものもあればそうでないものもある。大切な美しいものを受け継ぐということはひと目に触れることのない日々の様々な試みや挑戦、そして成功と失敗と反省の繰り返しの上に成り立っているものではないか。「残念だね～。でもまた作って焼けばいいさ」と笑顔で話す松田共司親方には、受け継ぎ手としてすべてを抱擁するやちむんへの向かい合い方、まさに沖縄のやちむんそのものが感じられた。松田共司親方にはそういう思いを伝えて表紙として使用することにご快諾いただいた。尚、このアンダガーミの写真は松田共司工房の裏の木陰で松田共司親方にお気に入りの向きを選んでいただいて二人でああでもないこうでもないと言いながら（蚊に刺されまくりながら）撮影したものである。所謂ハネモノとされるものであるが、どこか美しく、力強く、愛おしく、また嬉しそうに、そして大らかに輝いているように見えるのは気のせいだろうか。

参考文献

Chomsky, Noam. 2004. *The Generative Enterprise Revisited*. New York: Mouton de Gruyter.（ノーム・チョムスキー著（福井直樹・辻子美保子訳）『生成文法の企て』岩波書店 東京 二〇一一年）
Polanyi, Michael. 1966. *The Tacit Dimension*. New York: Doubleday.（マイケル・ポランニー著（高橋勇夫訳）『暗黙知の次元』筑摩書房 東京 二〇〇三年）

【謝辞】

本シンポジウムは研究者ではなくことば、やちむん、民藝に関心のある一般の方々を対象としました。そのため開催にあたってはいかに一人でも多くの方々にイベントの開催を知っていただけるかが大きな課題となり、様々な方のご協力なくしてはこのイベントの実現は不可能でした。松田共司親方にご紹介いただいたアイデアにんべんの黒川真也氏と黒川祐子氏にはご無

理を言ったにも関わらず快諾してくださり、少ない予算で本当に素敵なフライヤーを作っていただきました。またチラシの写真や当日の松田共司親方のパワーポイントで使用した写真は写真家の仲間勇太氏が撮影されたもので使用の快諾をいただきました。そして、北窯売店、Clay Coffee & Gallery、日本民藝館、鎌倉もやい工藝、craft house Sprout、good.stock_okinawa、工芸喜頓、工芸生活、58works、JOZO Cafe／ギャルリ雪月花、MOGI Folk Art、mofgmona の皆様にはフライヤーの設置などイベントの告知に大変大きなご協力を賜りました。改めましてここに感謝いたします。

また、毎日朝から夜まで工房の仕事で忙しい中いつも暖かく迎え入れくださり素人の筆者にいろいろな考えを聞かせてくださったり質問をしてくださった松田共司工房のお弟子さんのみなさん（五十音順に上原汐氏、崎原盛仁氏、島袋貴寿氏、島袋萌美氏、田中将也氏、辻本雄也氏、東條直斗氏、萩原陸氏、眞榮田知里氏）、沖縄語首里方言の調査研究で大変お世話になっている嘉数美津子氏、そして本シンポジウムの企画から運営まで様々な段階で大変にご尽力してくださった言語文化研究所の伊東絢氏にもここに感謝いたします。